



たちの・ゆみこ ミュンヘン大学医学部・社会小児科にて研修。国際ライセンス取得後、ミュンヘン小児センターにて勤務。モンテッソーリ治療教育の第一人者である小児センター初代室長のアンダリック女史に師事。現在、国際こども学フォーラム事務局でワークショップを主宰するほか、幼稚園、保育園（こども園）、高校・専門学校等をはじめ教育、福祉、医療等の現場で、療育・カウンセリング指導中。こどもの居場所「プレイトピア」も運営中。https://playtopia.jp/

「発達障がいって何？」
子どもの育ちを応援する
ひとに聞きました

心配しすぎない 「はったつ」の ミカタ

1回目ゲスト* 立野由美子さん

(AMI公認 国際モンテッソーリ治療教師、モンテッソーリ治療教育セラピスト)

やりすぎず、放置しすぎず

「発達障がい」に注目が集まるようになりまし。どうしたらいいのかわからない、と悩む保護者や保育者も増えているようです。

でも、ひとは誰もが、人生のどこかで「できなさ」を抱えることがあります。

生まれたばかりのあかちゃんも、高齢者も、お世話なくして生きられない点では、さまざまな「障がい」を生きるひとと同じです。わたしたち人間の社会は、「障がい」の有無にかかわらず、互いに共感しながら一緒に生きていくようにできています。そのために、それぞれに「できること」を尊重しあい、「できないこと」を補い合うように発展してきたのです。「発達障がい」についても、同じように考えるとよいのではないのでしょうか。

わたしたちの生活環境はどんど

んと目まぐるしく変化しています。AIの進化は、とてつもない速さで、わたしたちの生活を変えています。ひよつとしたら、友だちは「ロボット」と子どもたちが口々に言う時代もそれほど遠くないかもしれません。そんな進化のもと、子どもたちにはたたくさんの異変が起きています。

★ゲーム脳（語い力はあるけれどコミュニケーション力が不足）

★視野の狭まり（スマホの見すぎ）

★骨折しやすい（外であそばない）

★けがの多発（注意力の散漫）

★荷物を持って歩けない（体力の低下）

★お箸や鉛筆を正しく持って使えない（手の不器用さの増加）

★椅子に座れない（体幹の弱さ）

★授業中じっとできない（多動性）……などなど。

そして、ここに潜んでいる心配

事の山が、大人と子どもの関係を、たびたびギクシャクさせているのかもしれない。

ギクシャクしない育児のコツは、

子どもの育ちの速度に「付き合う」ことです。平均値に合わせて「管理」しようとしなくていいです。子どもの発達是一直線状ではなく、蛇行したり、同じところで足踏みしたりします。その一つひとつに「何でうちの子はできないの?」「いつも同じことばかり……」と気を揉めば、大人にとって育児は心配ばかりになります。そうではなくて、子どものようすを見守りながら、気長に付き合っていく気力のほうが大事なのです。

子どもに「できないこと」があったなら、「なんでできないの?」と嘆くより、一緒にやってみればいいのです。「まだやったことがなかっただけ」ということが、けっこうあるものです。子どもは成長することが仕事であり、それぞれの子どもなりの成長は、生まれたときから保証されているものです。ただそれが、ゆつくりな子もいれば、

すばやい子もいる。「平均的な成長」というものは本当は存在しない、

というのが、子どもを見るとときには重要な視点になります。

また、「子どもと向かいあうときに、「できない」ことや「トラブル」の部分ばかりクローズアップすれば、子ども親も疲弊します。そうした傾向が強まって来たことで、「問題がある（育てにくい）」と見られる子どもが増えている、という面も否めません。

それより「昨日より今日、できるようになったこと」に注目しましょう。そうすれば、どの子もかならず、成長していることがわかるはずです。

ただし、保護者だけでの見守りは、過酷です。幼稚園・保育園のような集団のよさは、ほかの子のようすをみられる点にあります。子どもも、子ども同士の関わりのおかげで意欲を引き出され、育っていくことができます。まだまだ発達途上にいる子どもたちです。気長に、ゆつくり育っていくことを、大人もたのしめるといいですね。